

ディアレクティケーと善の形相

加 藤 幸 夫*

DIALEKTIKE KAI IDEA TOU AGATHOU

Yukio KATO

Key Words: Plato, Dialektike, Idea tou Agathos

アリストテレスは、『形而上学』（1078 b 28-29）において「二つのことが、正当にソクラテスに帰せられよう、すなわち、帰納的な論法と普遍的な定義をすることが」と述べている。しかしこのアリストテレスの言葉は、ソクラテスが初めてそのような学問上の方法を発明したとか、あるいはその方法を学問的方法として研究したとかいうことを意味しているとは考えがたい。プラトンの初期対話篇におけるソクラテスの問答内容からして、その問答の仕方の一つの型があり、問答の過程のうちにアリストテレスの指摘に当る部分も含まれている。しかしその問答全体は、いわゆる助産術(*maieutikē*)を展開するための、いわば道具のようなものであった。それは対話者の常識(*doxa*)を吟味し、それによって日常の生き方について反省を促し、徳を求める生を勧め励ますためのものであった。したがって、その問答において見られる論法も学問的な研究法といったようなものではなかった。だが、それへと発展させようような萌芽を備えていたと言えるであろう。その萌芽を発展させ、単なる対話を学的なディアレクティケー（哲学的問答法）として方式化したのがプラトンである。だが、プラトンがディアレクティケーという言葉で意味しているものは決して一様ではない。初期から中期にかけて、諸対話篇におけるディアレクティケーの性格もさまざまに変化している。

本稿は、プラトンの『国家』篇におけるディアレクティケーと善の形相について、それぞれの特性を明らかにしつつ、両者の密接な関係を探ることを意図

原稿受付：平成5年6月4日

*長岡技術科学大学計画・経営係

するものである。

1

プラトンはその初期対話篇において、ディアレクティケーについて特別な説明を施してはいない。しかし対話篇そのものが形相に至る過程を示している。対話のなかで、ソクラテスは常に質問者として問答を導いている。彼の問い方は何事かを教え込むとか相手の言葉を取り上げて、むやみに論駁するといったやり方ではなく、相手をして自分で自分の内から知識を産み出させようとするものである。問答において、まず始めに、ソクラテスは相手に問題解決のための仮設を立てさせる。その仮設は一般に人々に「そう思われている」もので、問答はその仮設を中心にして展開され、通例、対話者が「肯定」か「否定」かで答える形式で進行する。ところが問答のすえ、最初の仮設と矛盾した結論に達してしまう。そこで最初の仮設は破棄され、新たにより一層根源的な仮設が立てられる。こうして問答は順次根源的な局面へと展開し、次から次へと仮設の設定と破棄が繰り返され、ついに対話者は困窮(aporia)に陥り、自己の無知を自覚しそれを告白する。そこに至ってようやく、対話者はそれまで取り憑かれていた臆見(doxa)から解放され、aporiaの打開をめざしつつ、ソクラテスとともに真知を探究しはじめる。初期のいわゆる「定義的対話篇」においては、種々のテーマについて、その定義を明らかにする試みがなされるのであるが、『ラケス』において顕著なように、何ら明確な定義も得られないまま、対話そのものが終結している場合が珍しくない。

ところが、初期最後の対話篇と目される『メノン』になると、仮設の吟味を基軸にして問答が展開される。徳が教えられ得るかどうかという主題について、先ず「徳は知識である」という仮設を設定した場合、どのようなことが帰結されるかが問題となる。対話者メノンは、この仮設から直ちに徳が教えられ得ると帰結する。だがソクラテスは、「徳が知識である」という仮設が吟味されねばならないことを提案し、吟味問答の過程において「徳は善である」という新たな仮設を設定する。そして、この新たな仮設を吟味した末に、徳は知識であるという命題が同意され、その限りにおいて、徳は教えられるものであるという結論に達する。

『メノン』におけるこのような展開は、最初の仮設が「絶対に動かせないもの」(『国家』533C)として扱われず、より一層高位の仮設によって吟味されている点においては、『国家』第6巻における仮設に類似しているが、より高位の

仮設が依然として一つの仮設にすぎず、決してアルケー (archē: 始原) に達していない点においては類似していない。

ところで『バイドン』によると、ソクラテスは万物の真の意味の原因を探るに当たり、アナクサゴラスの機械的自然観に失望して、「理論的考察という手段に訴えることによって、事物の真相を理論 (logos) のうちに考察しなければならない」(『バイドン』99 E) と考えた。そこでソクラテスが新たに出発した途は、仮設法に基づく考察の仕方である。それは「それぞれの問題にさいして、これこそ最も確かだとぼくが判定する言説 (logos) を前提として立てたうえで、その(仮設)前提と一致するように思える事柄は、これを真であるとみなす。問題が原因についてであれ、そのほかのいかなるものについてであれ同様である。そして、その前提と相容れないように思われる事柄は真でないときめつける」(『バイドン』100 A) というやり方である。

だが、事実と相容れない仮設、もしくは互いに排除し合うような仮設はもちろん廃棄されなければならない。『メノン』の場合と同様、設定された仮設に一致するように思われる真理も、必要に応じては、さらに高位の仮設によって証明されなければならない。すなわち「もし誰か、前提そのものに拘泥するものがいたら、君はそれを相手にせず、前提から出発して出てきたいろいろの帰結のあいだに矛盾があるかどうかをしらべるまでは、答えようとしないうえ。もし実際に前提そのものの根拠を立証しなければならないときがきたら、君は同様にして、さらに上位に来るべき前提のなかから最善と思われるものを選び、あらためて別に前提として立てたうえで、そこから証明を行い、最後にこれで充分というものに到達するまでつづける」(『バイドン』101 D E) ことになる。この「上位の前提」とは、より普遍的な仮設であり、それが以前の仮設に基礎を与えるのである。

しかし『バイドン』においても、プラトンはついに仮設を超越すること、即ちアルケーには考えが及ばなかったように思われる。なぜならアルケーと「これで充分というもの」とは、仮設がそこで止まるという点で一致する以外は、全く異なっているからである。つまり、アルケーは統一の原理として他の一切を含むが、「充分なるもの」は尚これに対立するところの「多」にはかならないのである。

さて『国家』篇においては、その副題にもある《正義》が全篇の有力な主題

になっていると見なされるが、より正確には、正義論と国家論という二つの主題があるとするのが適切である。その『国家』篇の第5巻から第7巻においては、理想国家のあり方と条件、とくに哲学の役割について論じられ、とりわけ、第6巻～第7巻では哲人統治者のための知的教育が問題となっている。

アカデメイアは哲人統治者たるべき者の教育を意図して創設された学園であり、そこでの具体的な教育プログラムのなかにディアレクティケーが展開されている。

アカデメイアの教育科目は、教育 (paideia) とは生成についての思索から存在についての思索へ魂を転向すること (peritrophē) である、という原理に基づいていた (Burnet, J. Gr. Ph. 1., p. 223)。魂の転向ということは、そもそもピタゴラス派の原理であり、またアカデメイアの設立そのものもピタゴラス派の示唆によるものであった。そのために、教育科目もまた同派のそれに準じていた。ところがピタゴラス派では平面幾何学に限定されていたが、アカデメイアではそれに立体幾何学が加えられたために、教育科目は算数術、平面幾何学、立体幾何学、天文学、音階論の5科目となった。これらの科目のうち、前四者はディアレクティケーのための「序学」(prooimion 531D) または予備的学問 (propaideia 536D) といわれ、いずれも数学を基礎としていた。それゆえ、アカデメイアでは数学的諸学科がとりわけ尊重され、二十歳から三十歳に至るまで、約十年の間これを学ばねばならなかった。

プラトンによれば、魂 (精神) が数学の領域を探索する際には、現物であったものを似像として用い、仮設 (前提) から出発して、始原 (原理) へさかのぼるのではなく、結末へと進んで行くことを余儀なくされる (510B)。すなわち、幾何や算数やそれに類する学問を学ぶ人たちは、奇数と偶数とか、さまざまな図形とか、角の三種類とか、その他これと同類の事柄をそれぞれの研究に応じて前提として設定し、それらを既知のものとみなす。さらに、そうした事柄を仮設として立てたうえで、これらのものについては自分自身に対しても他の人々に対しても、もはや何ひとつその根拠を説明するにはおよばないと考えて、あたかも万人に明らかであるかのように取り扱う。そして、そこから出発してただちにその後の事柄を論究しながら、最後に、自分たちがとりかかった考察の目標にまで、整合的な仕方では到達するのである (510CD)。換言すれば、「数学的諸学科を学ぶ人は目に見える形象を補助的に使用して、それらの形象についていろいろと論じる。ただしその場合、彼らが思考しているのは、それらの形象についてではなく、それを似像とする現物についてであり、彼らの論

証は四角形そのもの、対角線そのもののためになされるのであって、図形に描かれる対角線のためではなく、その他同様である。」そして彼らは、「思考 (dianoia) によってしか見ることのできないようなかのものを、それ自体として見ようと求める」のである (510E-511A)。

従って、数学的領域は、＜思惟によって知られるもの＞(noēton)ではあるが、しかし魂(精神)がそれを探求する際には、さまざまな仮設を用いざるをえず、それら仮設(前提)のさらに上方へ歩み出て行くことができないかのように、アルケーにまでさかのぼることをしないのである (511A)。

幾何学の方法が、形相の影像にすぎない感性的要素の助けを借りるのに反して、他方、ディアレクティケーは直接形相に向かうところに、両者間の相違がある。そして上述の予備教育の4教科も、それぞれが感性的なものに依存しない程度に応じて、一定の秩序を与えられてはいるが、しかし幾何学者の描く図形が仮設であるというのは、単にそれが感性的なものであるということに留まらない。幾何学者の仮設する諸々の仮設も、その仮設から存在性が導出されるものである。(アリストテレス『分析論後書』A76a34. b9sq.) 従って、彼らの図形が仮設であるといわれる時、それは彼らの発見する存在(『エウチュデモス』290C)が仮設であると解されなければならない。線は数によって規定され、立体は平面によって限られているがゆえに、立体の存在は平面の存在に、また平面と線との存在は数の存在に還元され、こうしてその存在は決して原理的・根源的なものではなく、「充分なるもの」(hikanon ti)でしかないために、仮設でなければならないであろう。

以上のように考察すると、「ある程度實在に触れるところがあると言われた幾何学、およびそれにつづく諸学術は、さまざまな仮設を絶対に動かせないものとして放置し、それをさらに説明して根拠づけるということができないかぎりにおいて、實在について夢みているけれども醒めた目で實在を見ることは不可能」(533C)である。なぜなら、そもそもの出発点として、自分がほんとうには知らないものを立てておいて、結論とそこに至る中間は、その知らないものを起点として織り合わされているとすれば、そのようにして得られた首尾一貫性は、けっして知識とはなり得ないからである (ibid)。

数学における論証は、このように仮設を原理として行われるものであって、アルケーにまで遡ることが出来ないから、その仮設は、結局、いつまでも仮設としてとどまる。アリストテレスが算術家について述べているように、「算術学者は、『一つ』が『何であるか』、また『一つ』が『あること』とを共に論証の

基礎として措定する」(『分析論後書』B93b24)。そしてそれから必然的に出てくるものを帰結する。しかし、その仮定された《一つ》が真に存在するということを証明するのではなく、それを単に与えられたものとして受け取るのである。これが「仮説からの研究」の意味である。同様にその帰結もアルケーにまで上昇するのではなく、したがって帰結されたものの存在が問題ではなくて、仮説に対する関係の必然性が問題となっている。

3

プラトンによれば、計算術や幾何学および数学的諸学科はディアレクティケーのための予備学科であるが、それらの学科に熟達することは、とりもなおさずディアレクティケーの知識を得る上で、つまりはイデア認識のための前段階として必要欠くべからざることである。「あらゆるものについて筋道の通ったやり方で、それぞれのもの自体がまさに何であるかを把握しようとするには、予備的諸学術のほか、何か別の探求の道すなわちディアレクティケーがなければならない」(533B)。

ディアレクティケーの探求の行程だけが、「仮説をつぎつぎと破棄しながら、アルケーそのものに至り、それによって自分を完全に確実なものとする、という行き方をする」(533CD)のである。数学的諸学術にあっては、「充分なるもの」として同意された帰結が行程の終止点であるがゆえに、その「同意」がなお仮説であるにもかかわらず、それは「絶対に動かせないもの」(533C)である。だがディアレクティケーにあっては、このような仮設もなお吟味され「廃棄」(anairein)されて、上昇的にアルケーに進まなければならない。それゆえ、アルケーに達するまではあらゆる不動の同意も「踏み台にして出発点」としての意義しか持たない。

ディアレクティケーによる直感的認識(noēsis)によって観照しうる最上位の可知界とは次のようなもののことである。すなわち、「^{ことわり}理」(logos)がそれ自身で、問答(対話)の力によって把握するところのものであって、この場合<理>は、さまざまな仮設を絶対的始原とすることなく、文字どおり<下>に置かれたもの>となし、いわば踏み台として、また躍動のための拠り所として取り扱いつつ、それによってついに、もはや仮設ではないものにまで至り、万有の始原に到達することになる。そしていったんその始原を把握したうえで、こんどは逆に、始原に連絡し続くものをつぎつぎと触れたどりながら、最後の結末に至るまで下降して行くのであるが、その際、およそ感覚されるものを補助的に用

いることはいっさいなく、ただ＜実相＞（イデア）そのものだけを用いて、＜実相＞を通して＜実相＞へと動き、そして最後に＜実相＞において終わる」（511 B）のである。

我々はここに明らかにディアレクティケーの二つの行程、すなわち上昇の道と下降の道とを見るであろう。この二つの道は『パイドロス』（266 B）においては、「総合」（sunagōgē）および「分割」（diairesis）として特徴づけられたものである。「多様にちらばっているものを総観して、これをただ一つの本質的な相（形相）へとまとめること」（ibid. 265 D）が前者の意味であり、「定義を与えて、分たれないものに至るまで形相に従って分つこと」（277 B）が後者の意味である。

『国家』篇における上昇的総合的なディアレクティケーは、廃棄された仮説を契機としてふくみながら、アルケーに至るものであって、契機としてふくまれた個々の仮説、すなわち暫定的に承認された定義はアルケーによって存在の基礎を与えられる。それゆえに、あらゆる個々の事象もアルケーに基礎づけられて存在となると言える。このような意味を踏まえると、ディアレクティケーの能力をもつ者とは、「それぞれのものの本質を説明する言論を求めて手に入れる人」（534 B）であるばかりでなく、「ばらばらに雑然と学習したものを総合して、もろもろの学問がもっている相互の間の、また実在の本性との、内部的な結びつきを全体的な立場から総観する」（537 C）人である。

ディアレクティケーに或る契機としてふくまれる仮説のなかに、何か感性的なものが関連しているということ（例えば『パイドロス』の想起）を除けば、ディアレクティケーが感性的なものと無関係であることは明瞭である。なぜなら、それは「ただ＜実相＞そのものだけを用いて、＜実相＞を通して＜実相＞へと動き、そして最後に＜実相＞において終わる」（511 B）からである。それゆえ、形相から感性に至る道は閉ざされていると同時に、他方においては、アルケー（第一原理）はあらゆる存在の根源として、またそれを総合統一するものとして、＜一＞であって同時に＜多＞をふくんでいなければならない。

4

ディアレクティケーにおいては方法的側面と対象の側面とが問題となっている。われわれはこれまで主に前者の方法的側面から考察を重ねてきたが、ディアレクティケーの特性を二つの側面に分けることは、本来不可能であると言えるよう。

『国家』篇において、対話者グラウコンがディアレクティケーの方法的側面をたずねた時、ソクラテスが答えたのはディアレクティケーのみが示しうる対象についてであった。すなわち「君に示されるのは、もはやこれまでのように、われわれの言おうとする事柄の似像ではなくて、直接《真実そのもの》となるだろう——少なくとも、ぼくにあらわれたかぎりでのね。ぼくがその《真実》をほんとうに正しくみているかどうかということまで、確言することはできないが」(533A)。この《真実そのもの》とは《善の形相》を意味し、それは『国家』篇において特殊な意味を賦与され、あらゆる生成し消滅するものの原理としての、「本当の善、つまり万物を結束し統合すべきもの」(『パイドン』99C)でもある。

善の形相がプラトン哲学において特殊な意味と地位を有するに至ったのは、むしろその方法論的側面の発展による。すなわち善の形相は、いかなる制約をも受けない始原として、困窮(aporia)に陥っていると見做される他の対話篇の議論内容に、確かな基礎を与えている。つまりプラトンは、ディアレクティケーと幾何学的仮設とを峻別して、善の形相を前者の立場からアルケーとしての原理に引き上げ、敬虔、義務、勇気等々にアルケーとの関係において存在性を与えている。従って善は存在と知識との根拠として、logosの中においてでなければ把握されないものとなった。まさしく「〈善〉の実相(イデア)こそは学ぶべき最大のものであり、この〈善〉の実相がつけ加わってはじめて、正しい事柄もその他の事柄も、有用・有益なものとなる」(505A)のである。

ところでプラトンのいう〈善〉とは何であろうか。プラトンによれば善が「多くの人々には快楽(hedonē)のことだと思われているし、他方、もう少し気のきいた人々には知恵のことだと思われている」(505B, cf. 『ラケス』199C, 『メノン』88A-89A)。だが、このような規定は、さまざまな快楽が存在することや、また、知恵といってもいかなる知恵のことなのか判然としないかぎりにおいて、適切であるとはいいがたい。つまり、〈善〉については意見の違いが大きく、論争が絶えない。だが、〈善〉の独自性だけは明確である。すなわち、「正しいことや美しいことの場合は、そう思われるものを選ぶ人が多く、たとえ実際にはそうでなくても、とにかくそう思われることを行い、そう思われるものを所有し、人からそう思われさえすればよいとする人々が多い。しかし善いものとなると、もはや誰ひとりとして、自分の所有するものがただそう思われているというだけでは満足できないのであって、実際にそうであるものを求め、たんなる思われ(評判)は、この場合にはもう誰もその価値をみとめない」(505

D).

＜善＞は、「すべての魂がそれを追い求め、そのためにこそあらゆる行為をなすところのもの」であるが、＜善＞の本質がそもそも何であるかについては、「魂は困惑してじゅうぶんに把握することはできず、さらに他の事柄の場合のように、動かぬ信念をもつこともできないでいるもの」(505DE)である。そこでプラトンによれば、「さしあたっていまのところは、＜善＞とはそれ自体としてそもそも何であるかということは、わきへのけて」「そのかわり、＜善＞の子供にあたると思われるもので、＜善＞に最もよく似ているもの」について、考察することになる(506D)。

＜善＞の子供とは太陽のことであり、＜善＞は太陽を、自分と類比的なものとして産み出す。すなわち、思惟によって知られる世界において、＜善＞が＜知るもの＞と＜知られるもの＞に対してもつ関係は、見られる世界において、太陽が＜見るもの＞と＜見られるもの＞に対してもつ関係とちょうど同じである(508BC)。

現象の世界が太陽の光に照らされて初めて、視覚によって見られるように、不可視なる形相の世界は善の形相に照らされて初めて魂に見られるものとなる。

「認識される対象には真理性を提供し、認識する主体には認識機能を提供するものこそが、＜善＞の実相(イデア)」(508E)にほかならず、「＜善＞の実相は知識と真理の原因(根拠)であり、たしかにそれ自身認識の対象となるもの」である。しかし、認識と真理とはどちらもかくも美しいものではあるが、＜善＞はこの両者とは別のものであり、これらよりもさらに美しいものである。また知識と真理の両者とも＜善＞に似てはいるが、そのまま＜善＞にほかならないと考えるのは正しくない(508E-509A)。太陽はそれ自身生成ではないが、見られる事物にたいして、ただその見られるという働きを与えるだけでなく、さらに、それらを生成させ、成長させ、養い育むものである。それと同様に、＜善＞は、もろもろの認識対象が確かに認識されるようにするだけでなく、認識対象にその実在と実在性がそなわるようにするのである。しかし「＜善＞は実在とそのまま同じではなく、位においても力においても、その実在のはるかかなたに超越している」(509B)のである。

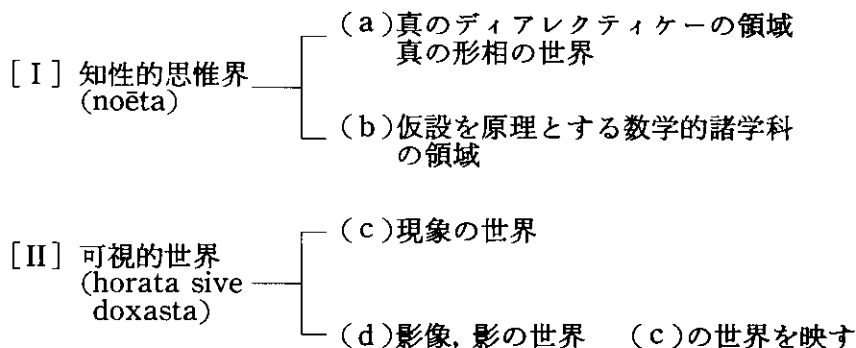
このように太陽が可視界を支配するように、善のイデアは思惟界の存在と認識との原因として思惟界を支配する。すなわち思惟界において、思惟するものは理性(nous)であり、思惟されるものは諸形相(ideai)である。善のイデア

はヌースに思惟力を与え、諸形相に真理性を与え、それによってヌースをして諸形相の認識を可能ならしめる。従って思惟界における太陽の光は、善のアイデアから発現する真理性である。

また、認識されるものは存在しなければならない。しかしその存在は真理の光に照らされなければ我々にとっては実在としては現れない。従って真理性の原因は同時に存在性の原因でなければならない。

また太陽と光との関係においてはその光によって我々に視られるのであるが、太陽は光そのものとして光の根源である。それと同様に、善のアイデアはその真理性のゆえに認識されるのであるが、それ自身はアイデアの存在性と真理性との根源であって、それ自身真理そのもの、存在そのものである。従って、太陽が可視的であるというのは光を媒介としてであって、光なしには太陽は視られない。それと同様に、善のアイデアが思惟の対象となりうるというのはその真理性を媒介としてであって、真理を見ないものには善のアイデアは見えないのである。すなわち、太陽が他の可視的なものとは異なった存在であるのと等しく、善のアイデアは他のアイデアとは異なった存在である。それゆえ、アイデアに対して善のアイデアこそは真の存在 (ontōs on) であるといわねばならない。この意味において善のアイデアはアイデア的な存在の彼方において在るといわねばならない。

因に、これまで考察してきた思惟の対象ではあるが可視的でない形相の世界 [I] と、可視的ではあるが思惟されない現象の世界 [II] とを区分して図式化すると次のようになるであろう。



[I] の知性的思惟界に属する (a) と (b) との相違は、既に述べたように

ディアレクティケーと数学的諸学科との相違である。善の形相はディアレクティケーの行程の出発点ではなくその目的である。ところが、数学的諸学科における魂の精神活動は「思考」(dianoia)であって、ディアレクティケーにおいて現れる「知性的思惟」または「理性」(noēsis sive nous)と「思わく」(doxa)との中間にあるものとして規定される。数学的諸学科が仮設から出発して図形を用い、それゆえなお感性的要素をふくむ点において、思考は理性から区別される。また〔II〕の可視的世界のうち(c)に対しては「確信」(pistis)、また(d)に対しては「影像知覚」(eikasia)が配置される。この「可視的世界」は「可視的なもの」(horata), また時には「思わくされるもの」(doxasta)とも言われる。

『国家』篇第五卷(476B-480A)によれば、「思わくされるもの」のなかには視覚その他の感性の対象のほか、「多数の人々の、美やその他のものについての、多くの常識」(479D)もふくまれる。それゆえ、可視的世界に関する二つの働き即ち「確信」と「影像知覚」とが、後には共に「思わく」の名の下に総括される。

思わくが感性を含んでいるという考えは、第七卷の533E-534Aに至って明確に示され、感性が精神の働きから完全に除外されると同時に、さらに知性的思惟の世界に関しても、知性的思惟または理性の代りに「知識」(epistēmē)が現れ、知性的思惟は知識と思考との両者をふくむものとなる。大まかに分類すれば次のようになる。

- | | | | | |
|---|---------------|---|-------------------|----------|
| a | 知識(epistēmē) | } | 知性的思惟
(noēsis) | 実在を対象とする |
| b | 思考(dianoia) | | | |
| c | 確信(pistis) | } | 思わく
(doxa) | 生成を対象とする |
| d | 影像知覚(eikasia) | | | |

「実在」の「生成」に対する比は、「知性的思惟」の「思わく」に対する比に等しく、「知性的思惟」の「思わく」に対する比は、「知識」が「確信」に対する比、および「思考」が「影像知覚」に対する比に等しい(534A)。

善の形相は、知性的思惟の対象である実在の遙かなたに超越して、存在と知識との根源である。しかし善の形相を他の一切のものから区別して、

logosによって定義することのできない人は、単に善の形相を知らないばかりではなく、一般に善の何たるかを知らず、夢の中で生活しているようなものである(534B)。このような善の形相に達する道がディアレクティケーであり、それゆえ、ディアレクティケーはあらゆる学問の上に、いわば最後の仕上げとなる冠石のように置かれていて、もはや他の学問をこれより上に置くことは許されないのである(534E)。

ディアレクティケーを通じて善の形相へ至りうる行程を、プラトンは次のように述べている。

「人が哲学的な対話・問答によって、いかなる感覚にも頼ることなく、ただ言論(理)を用いて、まさにそれぞれであるところのものへと前進しようとするとき、最後にまさに<善>であるところのものそれ自体を、知性的思惟(*noēsis*)のはたらきだけによって直接把握するまで退転することがないならば、そのとき人は、思惟される世界(可知界)の究極に至ることになる」(532A)

logosによって存在自体の各々に進むという上昇の道を示すこの言葉と、先に考察した「ただ<実相>そのものだけを用いて、<実相>を通して<実相>へと動き、そして最後に<実相>において終わる」(511B)という言葉とを考え合わせるならば、善の形相から存在を受け取る諸形相全体が、善の形相を頂点とする一つの段階を構成していること、したがってまた、個々の形相は善の形相の表現または顕現であるということは明瞭である。

5

『国家』篇における洞窟の比喻によれば、地上の世界は一つの洞窟に譬えられ、人間たちがこの洞窟の中に閉じ込められ、前方を向いたままで固く縛られているのである。この縛られている人々の背後では火が燃えていて、彼らは洞窟の一部に映る自己および自己の背後の物体の影を見ることができる、がしかし、ただそれしか見ることができない。彼らは縛られている鎖が解かれた時に初めて後ろを見回すことが出来、その物体そのものを見ることが出来る。そしてこの洞窟から這い上がって太陽の光のもと引き出された時に、彼らの眼は、最初は光に眩惑されて何ものをも見ることが出来ないが、やがて太陽の光で対象を見ることができるようになり、最後には太陽そのものを見ることができるようになる。ところが彼らがその後ふたたびこの洞窟の中に戻って来たとき、始めには何ものをも見ることが出来ず、そのために、一度も外部へ出ることのできなかった人々から嘲笑されるのである。しかし徐々に闇に慣れ、また見る

ことができるようになる。だが彼らは、かつて太陽の光の下で見た明るい世界の想起を常に保ちつづけるのである (514A-521B)。

プラトンによれば、このように地上の洞窟の内外を行き来することは真の哲学者に求められるべき認識活動でもある。真の哲学者はこの世界の変化極まりない事物の考察から、善の形相の光に照らされている不変の形相の認識に上昇して、ついには善の形相そのものを見るまでに至らなければならない。だが、善の形相そのものを見た後には、彼らはこの地上の洞窟に縛られている同胞の元に帰って来なければならない。彼らは地上の生活に慣れないために、最初は、地上の人間の嘲笑を買うようなことがあるかも知れない。そればかりか、もしこの地上の人々を解放して光に導いて行こうとすると、彼らはその人を捕らえて死刑に処するようなことさえあるかも知れない。それ故に一度太陽を見た人が、この地上の人々と一緒に生活することを好まず、常に上方の世界に憧れるのも一応はたしかに尤もであろう。

ところで、プラトンがこの譬喩から必然的な帰結として語っているのは、真の哲学者が市井の生活の外側に超然としていることは認めがたいということ、および、教育を受けず、真理をあずかり知らぬ者のみならず、教育を積むことだけに終始するのを許されている人も、国を充分に統治することは出来ないということである。なぜなら、前者の場合は、公私における行動が目指すべき、人生の一つの目標というものを彼らがもっておらず、後者の場合は、そういう人々がまだ生きているうちから既に「幸福の島」(makarōn nēsos)に移住してしまったようなつもりになって、進んで実践に参加しようとしなからである (519BC)。

人生の究極の目的因であるばかりでなく、あらゆる存在と知識との根源であるものを、プラトンが「善」という倫理的概念によって展開したわけが、この比喩の一節に示唆されている。彼が目指したものは国家を建設し統治すべきいわゆる哲人統治者の「教育 (パイデア)」であり、広義の意味において「人間の教育」であった。したがって、『ティマイオス』において展開されたような、天体や自然における善の足跡の問題には触れず、専ら人間の生活における善のはたらきを問題としたのである。この点からわれわれは、彼が既に形而上学的領域に深く立ち入っていたにもかかわらず、尚ソクラテスの軌道を歩んでいたことを窺い知ることができる。善の形相について彼は再びこのような仕方では語っていないが、『国家』篇において、語るべきことはすべて語りつくされていると言えよう。善の形相に究極する『国家』篇の哲学的認識論は一つの形而

上学的頂点を示している。それゆえ我々は、ディアレクティケーと善の形相について『国家』篇に説かれている以上に多くのことを知ることはきわめて困難であると言えよう。

使用テキスト

- J. Burnet (ed.), *Platonis Opera*, (O.C.T.) 1899-1906 (repr. 1973)
B. Jowett, *The Dialogues of Plato*, 4 ed. rev. by D. J. Allan and H. E. Dale, 4 vol., 1953
『プラトン全集』岩波書店 1976
『プラトン』（『世界文学大系』第3巻）筑摩書房 1986

参考文献

- R.C. Cross and A.D. Woozley, *Plato's Republic*, London, 1964
F.M. Cornford, *Plato's Theory of Knowledge*, London, 1939
P. Natorp, *Platos Ideenlehre*, Hanburg, 1961
B. Jowett and L. Campbell, *Plato's Republic*, Oxford, 1894
I.A. Richards, *Plato's Republic*, Cambridge, 1966
S.D. Ross, *Plato's Theory of Ideas*, Oxford, 1951
J. Stenzel, *Plato's Method of Dialectic*, New York, 1973
P. Shorey, *What Plato Said*, Chicago, 1933
斎藤忍随 『プラトン』 岩波書店 1972
田中美知太郎 『プラトンII』（1981）、『プラトンIII』（1892） 岩波書店
山本光雄 『プラトン』 勁草書房 1968